# 第５学年西組　国語科学習指導案

学習指導者　西岡　由都

## １　単元　文章の仕組みについて話し合おう―『動物の体』―

## ２　単元について

### （１）「思考力」育成に向かう思考活動

【該当する教科の「思考力」】

ことばとその意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，自分の知識や経験と結びながら熟考・評価する力

【本単元の「思考力」】

事柄の順序や軽重等，筆者の文章構成の仕方を熟考・評価する力

**【メタ認知的知識＝思考様式について】**

**例の順序や数に目をつける**

筆者は，述べたいことを，より分かりやすく読者に理解してもらうために，文章の構成を工夫している。例えば，三つの事柄を取り上げて説明をしようとする場合，その順序を工夫したり，大切にしたい事柄を詳しく書いたりする。そのような筆者の文章構成の仕方に目を向け，そこに表れた筆者の意図を探る力を身に付けさせたい。そのためには，上記の思考様式が必要である。筆者は，説明する事柄に応じてその特徴的な例を取り上げる。従って，例の順序や数に目をつけることが，事柄の順序や軽重等，筆者の文章構成の仕方を熟考・評価することにつながるのである。

しかし，例の数などに目を向けるだけでは，文章構成は捉えられても，なぜ筆者がそのような構成にしたのかという表現意図を探るまでには至りにくい。そこで筆者の視点に立って文章構成の意図を捉えるというメタ認知的活動を取り入れ，ことばとその使用者について熟考・評価できるようにしていきたい。

**【期待するメタ認知的活動の様相】**

**＜モニタリング（気づき）＞**

「動物の体」の文章構成図を作成した段階で，「序論・本論・結論」や，動物の体の「外と中」という事柄，寒い地方・暑い地方という対比を捉えることができている。期待するモニタリングは，そのような文章構成の背後には，筆者の表現意図が隠れていると気付いていく姿である。例えば，なぜ筆者は，動物の外の様子について先に述べているのだろうかといった，一旦捉えていた文章構成を，筆者の視点に立って見直している姿である。

**＜コントロール（計画修正）＞**

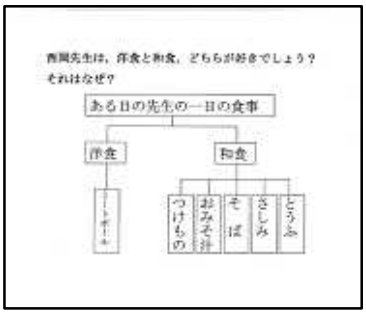
筆者の表現意図への問いを通して，これまでの文章構成の捉え方に別の視点を付け加えている姿が，期待するコントロールの様相である。例えば，先の例で言えば，「筆者は視覚的に分かりやすいから，動物の外見を初めに述べているんだ」という，筆者の視点に立った文章構成の捉えを付加している姿である。

### （２）脳神経科学の知見を生かした開発教材

**「教材文の文章構成図と仮想の文章構成図との比較」**により**「例の順序や数に目をつける」**という思考様式の獲得・把持を図る。

まず初めに，具体例として出された動物を事柄ごとにまとめた文章構成図Ⅰ（以下ツリー図【香川県教育委員会発行　香川型教材より】と呼ぶ）を作成する。ツリー図Ⅰによって，子どもたちは，「大きく動物の外の様子と中の仕組みに分けて書いている」や「気候を比べながら説明している」などの文章構成に気付くことができるだろう。しかし，それだけでは，筆者の視点に立って文章構成の仕方を捉えることはない。そのため，次にツリー図Ⅰに教師が作成した仮想のツリー図Ⅱ①②を対置する。ツリー図Ⅱ①は，本来「体の外→体の中」となっている教材文の構成を反対にしたものである。体の外・中という事柄に時間的順序はなく，「体の中→体の外」という文章構成であっても問題はない。そのようなツリー図Ⅱ①を対置することで，「なぜ筆者はラクダを先に説明しなかったのか」という問いが生まれ，筆者の視点に立って文章構成を捉えようとする。ツリー図Ⅱ②は寒い地方と暑い地方の動物を全て同じように対にして示したものである。それによって，「筆者はどうして，事柄ごとに例の数や取り上げ方が違うのだろう」ということに目が向く。つまり，図Ⅰと図Ⅱのズレから，子どもが着目すべき点を明確にするのである**（焦点化）**。

## ３　単元計画（総時数 13 時間）

| 次 | 主な学習活動と子どもの意識の流れ | メタ認知的活動を促すための働きかけ |
|---|---|---|
| 第一次 | **ツリー図を作りながら，動物の体を読み取ろう**<br>①　内容面（動物のこと）と形式面（筆者の書きぶり）とに分けて感想を書く。<br>動物の体って，よくできているなあ。<br>動物の例がたくさんあり，分かりやすく書かれているなあ。<br>②　説明文を六つに分ける。<br>序論・本論・結論に分けよう。<br>本論に出てくる動物の名前を黄色の付箋紙に書こう。<br>③　「体形」の項目を読み取る。<br>「実際に」「逆に」というつなぎ言葉の効果を考えよう。<br>分かっていること②→理由③→具体例④⑤⑥の順に書かれているな。<br>ツリー図の付箋紙を，ホキョクギツネは青，フェネックは赤にしよう。<br>キリンもゾウも赤い付箋紙の方がいいのかな。でも，ゾウは赤の例の仲間だな。<br>④　「体格」の項目を読み取る。<br>「また」というつなぎ言葉の効果を考えよう。ツリー図に書き加えよう。<br>分かっていること⑦→具体例⑧→理由⑨の順だ。体形の時とは違うな。<br>ホンシュウシカだけは，青と赤以外の付箋紙の色にした方がいいな。<br>それぞれを要約して，体格についてと，筆者の書き方について感想を書こう。<br>⑤　「毛皮」の項目を読み取る。<br>分かっていること⑩→例⑪→分かっていること⑫→例⑬の順に書かれている。<br>ニホンカモシカは青色，フェネックは赤色の付箋紙にしよう。<br>⑥　「体の外」の項目を読み取る。<br>つなぎ言葉から六つのことが書かれているのが分かるね。ツリー図に書こう。<br>体の中の仕組みは，ラクダだけしか例として上げられていないね。<br>⑦　結論から，全体の要約と要旨を見つける。<br>「～である。」と「～と言えるだろう」という文末の違いから考えるといいね。<br>本論で述べられていることと要約・要旨はつながっているね。<br>⑧　ツリー図を見て，文章構成について気づくことを書く。<br>寒い地方と暑い地方を比べながら書いているよ。<br>体の外から見える形と，中の仕組みという二つの大きなまとまりで書いている。<br>具体例が対比的に取り上げられ，それらが四つの小さなまとまりと，更に二つの大きなまとまりになっていることを書くことができる。 | ▼自分が今，説明文をどのように捉えているのかを単元の中で定期的に書き記していく。そして，それを振り返らせることで，どのように自分の文章の捉えが変化してきているのかに気づかせる。本単元では，まず第１時の初めて説明文を読んだ時に，「筆者の書き方」という視点を内容面とは区別して与え，感想を書かせる。次に，ツリー図を作成し終えた一次の終わりに，文章構成に着目した捉えを書く。最後に二次の終わりに，筆者の視点に立った文章構成の捉えを書かせる。これらを通して，自分の認知過程を認知できるようにする。<br><br>▼　筆者の視点に立って文章構成を捉えにくい子どもには，簡単で身近な言葉の構成図を示し，まずは書き手の視点に立って，その意図を捉えるという経験をさせる。<br>  <br> |
| 第二次 | **文章の仕組みについて話し合おう**<br>⑨　ツリー図ⅠとⅡ①を比べ，筆者の文章構成の仕方について話し合う。<br>筆者は，読者が分かりやすい例から上げているんだね。<br>⑩⑪⑫　ツリー図ⅠとⅡ②を比べ，筆者の文章構成の仕方について話し合う。　【本時　9/12】<br>筆者は，初めによく理解してもらえるよう，詳しく例を上げているんだね。<br>筆者は，結論に合うように，中間の気候の例もあげているんだね。<br>筆者は，ラクダの体の仕組みの素晴らしさが際だつように，一つだけ例をあげているね。<br>⑬　話し合ったことをもとに，文章構成について気づいたことをまとめ，１時間目に書いた感想と８時間目に書いた気づいたことと比べる。<br>一旦捉えていた文章構成には，どのような筆者の工夫があったのかを書くことができる。 | ▼思考様式を把持できるように，手帳に，言葉として書き残さ，いつでも振り返ることができるようにしておく。 |

## 4　本時の学習指導

（1）目標　ツリー図の比較から筆者の文章構成の仕方に目を向け，ゾウとキリンの例が取り上げられていることの意味を探ることができる。

（2）学習指導過程

| 学　習　活　動 | 子　ど　も　の　意　識 |
|---|---|
| 1　ツリー図Ⅱ②を見て，本時のめあてをつかむ。 | 先生の作ったツリー図では，消されている動物がいるよ。その代わりラクダのペアがいる。<br>寒い地方暑い地方一組ずつで，どれも「毛皮」の例の上げ方と同じだ。<br>どうして筆者の増井さんは，ゾウやキリン，ヤクシカなどの例を上げたのかな。体の中の仕組みでは、どうして，ラクダだけしか，例にあげなかったのかな。 |
| | **どうして筆者の増井さんは，ゾウとキリンの例を取り上げたのか話し合おう** |
| 2　例の上げ方について，筆者の意図を話し合う。<br>(1)ノートに書き，書けた子からペアになって話し合う。<br>(2)全体で話し合う。 | ゾウとキリンは，身近な動物だから，フェネックなどより想像しやすい。だから，筆者は読者によく分かるように，この例を上げたのだと思う。<br>ホッキョクギツネとフェネックは，耳だけを比べた例だった。それだけだと，体形の一部のことでしか説明したことにならない。だから，ゾウとキリンで，手足のことも説明しているのだと思う。<br>P36L７に，「体がまるっこく」とあるよ。ホッキョクギツネでは，そのことが言えないから，ゾウの例を上げたのだと思う。<br>ゾウとキリンなら，写真がなくても，よく知っているから，その体形の違いを絵に描くことができるよ。<br>ホッキョクギツネとフェネックは，教科書の写真を比べると，確かに耳の違いはよく分かる。<br>でも，よく知っているからと言っても，キリンもゾウも，温かい地方の動物だから，この２種類の例だけではだめだな。<br>ホッキョクギツネとフェネックは，寒い地方と暑い地方にすむ動物だということがはっきりしているね。<br>筆者は，２組の動物の例を取り上げることで，読者によくわかるように工夫しているのだな。 |
| 3　本時に獲得した思考様式をアイテム手帳に書く。 | 初めのツリー図（Ⅰ）から見つけた，文章の仕組みの気づきよりも，今日の気づきの方が，なぜそのような仕組みになっているかにも目を向けることができたね。どうしてかな。<br>前は，ツリー図のことだけを考えていたけれど，今日は，筆者の増井さんのことも思い浮かべていたよ。<br>文章の仕組みを見つけるには，筆者が上げる「例の数に目をつければ」いいんだね。<br>これからも，この考え方を使って説明文の仕組みを読もう。アイテム手帳に残しておこう。 |

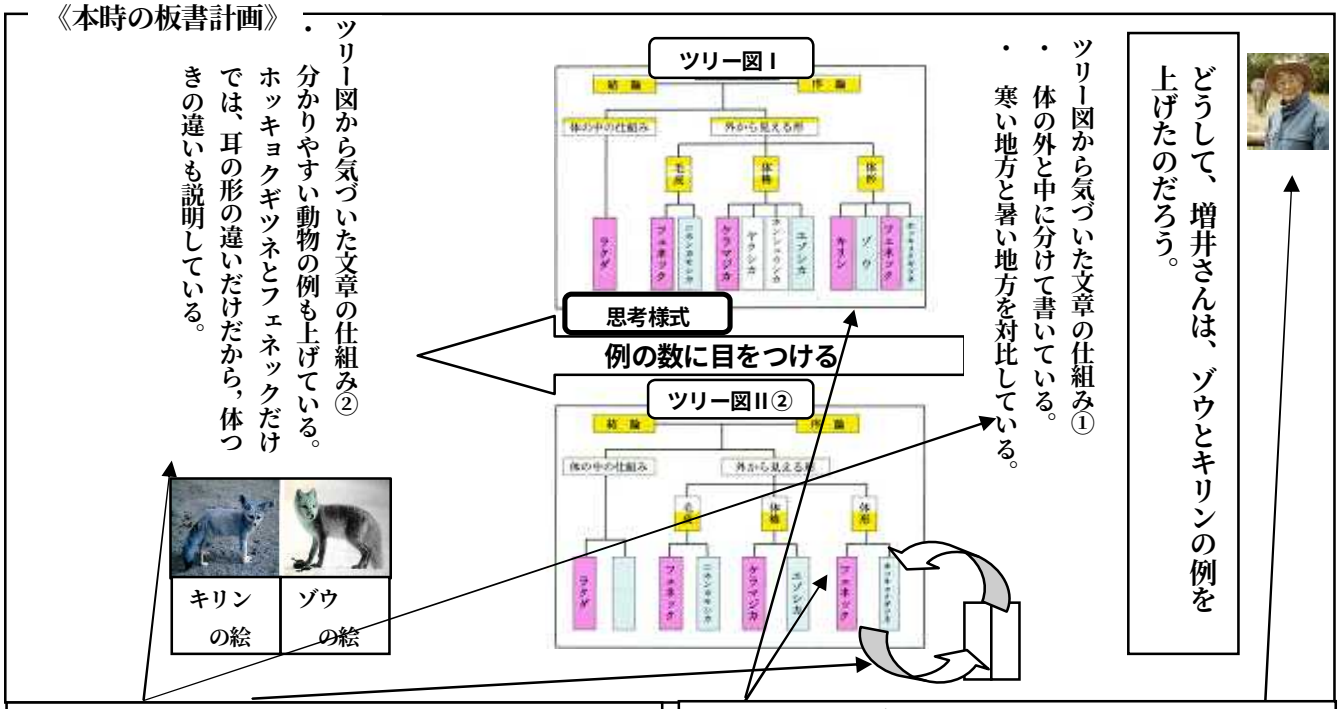
脳神経科学の知見を生かした教師の働きかけ

## 「教材文の文章構成図と仮想の文章構成図との比較」

「付箋紙の数や色」の違いに着目させることを通して，その背後にある「筆者の意図」に気づかせるはたらきかけ

本時の初めに，教材文の具体例の上げ方とは異なる教師の作った仮想のツリー図Ⅱ②を提示する。仮想と言っても，全く根拠のないものではなく，「対比して具体例を上げている」という，一次における子どもたちの文章構成への気づきから，それをもっとはっきりわかりやすくしたツリー図であることを伝えながら提示する。その上で，教師のツリー図は筆者の増井光子さんのものとどこが違うかを見つけさせ，「どうして増井さんは，先生のような文章の仕組みではなく，教科書のような例の取り上げ方をしたのだろう」と，筆者の表現意図に目を向けさせたい。本時は，「体形」の事柄で，ゾウとキリンが，ホッキョクギツネとフェネックに付け加えられている理由を探らせたい。その際，本文の叙述に手がかりを求めると共に，自分の経験（動物園へ行った）も想起するよう助言する。

《本時の板書計画》




**〈コントロールを促す働きかけ〉**

身近な動物のキリンとゾウだけではどうかと問う。

１次の最後に書いた，文章の仕組みについての気づきと，本時に気づいたことを比べさせ，筆者の立場に立って文章構成を考える大切さを確認する。

**〈モニタリングを促す働きかけ〉**

ツリー図ⅠとⅡ②を比較しやすいように掲示し，それらの相違点を探すことを通して，筆者がなぜそのような例の取り上げ方をしたのかということに目を向けさせる。筆者をより意識できるよう，筆者の写真を提示しその存在を意識づける。

【評価】方法：ノート及び発言

Ｂ：経験または叙述に基づいて，筆者の表現意図を書いている。
Ａ：経験と叙述の両方に基づいて，筆者の表現意図を書いている。

〈B例〉

キリンやゾウは，動物園でよく見かける動物です。そんな，誰もが知っている動物を例にして，誰にでも分かるようにしているのだと思います。

〈A例〉

ゾウやキリンを例に上げたのは，フェネックなどの耳だけの特徴だけではなく，「体つき」についても説明するためです。また，親しみのある動物だと，想像がしやすいからです。